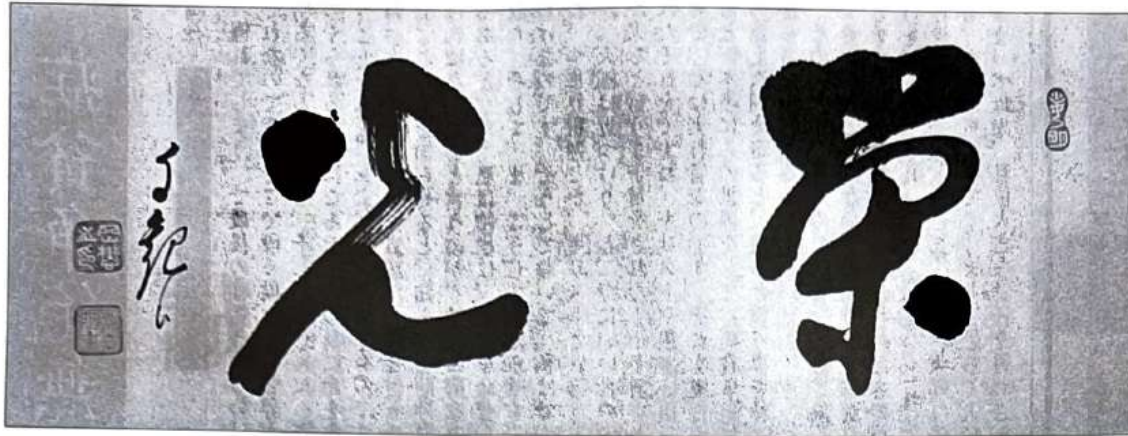


夜昼を分ける最後の審判



発行所

京都市左京区
吉田神楽岡町3

世界救世教黎明教会

郵便番号606-8311
電話075(771)2022番

各面の内容

- 1、2面 明主様の御教え
- 2、4面 初代会長先生 御教えの研鑽
- 4面 明主様御生誕142年祭
- 5、6面 御生誕祭ご挨拶 会長先生
- 7、8面 御生誕祭ご挨拶 会長先生
- 8面 御生誕祭142年祭記念講演

明主様の 御教え

処で、このもう一つ私言いたい事はですね、キリスト教にある最後の審判です。御釈迦様が言う仏滅の世と、——これは色々、教祖、開祖が言われていますけれども、私はこの二大聖者の事だけに留めておきますけれども、それは最後の審判と言うのはですね、ということかと言うと、ただ最後の審判だけではですね、何か神様がこう……と思うんですが、地獄でなく

日比谷公会堂における御教え(後半)

この現世に闇魔様が出て来て裁くんじやないかというように思うのですが、そうじゃない。これはちよつとね。この未信者の人には、分りにくいのですけれど、この霊界と言うものがあるのですね、霊界……。この我々がこう物質をこうさったり、見えたりするのはこれは物質界ですね、現界……それからその奥に霊界がある。その中間に空気があるですね。空気界までは分っているけれども、霊界は分らない。丁度さっきの野蠻時代から文化時代、文明時代とこういうような順序ですね。この三段階のうちのその物質界、それから空気が、霊界と、その三段階になつてゐるんです。処が世界の循環率ですね、循環率によつて明暗ですね、暗くなったり明るくなったり。これが一昼夜の二十四時間にこれがあるの

明主様御真筆 栄光

すると夜の文化でいらぬものが沢山出てくる、ま、昼間になるとこの電灯やいろんなそう言うものがいらなくなる、と言うようにですね、その、夜の時代のもは此処でいらなくなることが減びるって言うのです。審判という事は夜昼を分けるのです。いらぬものは先ずしまふか、或いは毀すか、でこれから明るいものを段々造つて行くと、こう言う具合です。そうすると、その今の霊界が明るくなるとですね、どういふ事になるかと言うと、人間ですね、人間と言うものはその、やはり体とそれから霊ですね、霊とその間に空気に相応すべきこの水分というものがあつた。水蒸気これが人間の体に非常にあるんです。そういう三段階になつてゐる内の人間の霊ですね。魂と言つてゐる。それが霊界に属してゐる。霊界が明るくなるとですね、その明るさに相応しない魂の人はですね、どうし

はなくてですね、一年にも明暗がある。一年の明暗と言うものはですね、仮に冬はですね、あれは暗い、と言う事になると夏は明るい、こうなるんですね、太陽の光線から言つても夏が一番強烈なものです。冬は一番薄いのだからして、これも明暗になつてゐる。これが又、十年にも明暗があり、百年にも明暗がある。歴史上ですね平和時代もあるし、又暗黒時代もあるのは、やはりそう言つた一つのリズムなのです。それから今度は千年にも万年にもある。それで今迄はこの暗の時代であつたですね。暗い時代だった。今度明るい時代になるのです。明の時代ですね。そこでこのさつき文明時代、文明の明の字を書く、明るいと言う字、化ではバケですから駄目です。そうすると明るい時代になるとですね、そうすると、今までの暗い時代のもが整理されるのです。そして私の方で言うところの夜の世界と昼の世界と、夜の文化と昼の文化と、こう言つて居りますがね、そう

でもその相応するようにその曇りを取られるのです。取られると言つて何も強引にとる訳じゃないですね、自然に浄化すべき、その汚ないものが綺麗にされなければならぬ。そうすると魂の汚ない人はですね、霊界が明るくなるにつれて掃除をされる、それがまぎれみです。で、病気の原理もそういう事に説いてあります。それによると病気の言ひがよく分るのです。今迄はこの霊と言ふ事を知らなかつた。無視した。さつき徳川さんの言われたように魂ですね。魂というものの働きというものは、大きなものなんです。大変なものです。私は、昨日ですね、一年ぶり位で来た人があつた。処が一年ぶり位で昨日その人の事をひよつと頭に浮かんでですね。今どうしてゐるだろうと思つた処が、昨日来たので「ああ霊が先に來てんだな」とこう思つた。と言うのはこつちで、こう徳川さんが松浪と言ふ人を、その一生懸命に書いてゐると、いう——思つてゐるとその想念と言ふものが向うに行くのです。その人の——行つてその人の体へ入る。頭へ行つて、此処までくるとですね。あつと浮かぶのです。

逢おうと言つて、来るようなものです。その要するに霊線と言つてそういう具合に交通するのです。これはこの霊線の何でですね。働きのなんだけれど。恋愛問題なんかには解釈すると非常に面白いです。けど今恋愛問題の目的じゃないですからね。これは信仰に入つたらそういう事も分つてきます。(中略) そういう事が分るとですね、大いにそういうその悲劇や悪い社会悪なんかなくなるとですね。ま、それはそれだけにして置いて……

今言つたような工合にですね、この霊ですね。霊の曇りを明るさに相応するようになる時に、病氣位で済めばいいけれども、そうでなくとも強くなる。するとどう病氣なんかには堪えられないで、その人は死んでしまふ。あれは病氣と言ふものはですね、この、少しづつ来るから病氣でね。あれでいいのですがね。あれで一べんに來た

以下2面へ続く

病貧争絶無の地上天国を造る

1面からの続き

ら倒れてしまふ。で最後の審判と言うのはそれなのです。そこで段々段々その霊界が明るくなるにつれて、そして一べんに、このやられることになる、その為を命を失うことになる。それが大量になるのです。大量になつては可哀想だからと言うので、この事を知らせると、知らせた助けなければならぬと言ふのが、神様の御意志であると。で、私は神様に、それを命ぜられた。そして、ま、こうしてお知らせするわけなのです。そうしておいて、私はですね。つまり釈迦とか、キリストとか言う人が、天国は近づけり、と、今にいい世の中が来ると言うま言をされた——予言をされたそれをですね、キリストや釈迦は預言者で、私は実行者なのです。それを実行すると、本当にこの世界をして、病貧争絶無の地上天国を造ると、造ると言う事を神様から命ぜられてるんです。

その代り私が作るのではないから、決して骨が折れる事はない。万事神様が御膳立しますから、ただその形に表われたものだけをですね、やればいいのです。これは、非常に楽なんです。しかし楽だと言っても、責任は重いのです。まあ、恐らく人類肇まって以来、私位大きな責任を負わされ

たものではないでしょう。そうすると、それによつてですね、偉い人達の予言がね、あつて来るのです。ですから私の方で言うにはですね、もしキリストや釈迦が言つた予言がですね、実際実現性が無いとしたら、これは予言じゃなくて虚言だつていうんです。いわゆる虚言とは嘘吐きです。あんな偉いんですね、人が嘘を吐くと言ふ筈はないんだから、いずれば誰かが、実現させるものが出なければならぬ、というような意味で、それでその担当者として私が選ばれたと、こういう訳なのです。で私はこういう事をですね、こんな大きな事をですね、この言うて事は、実際そのつらいのです。あんまりだいいそれた事のように、いいにくいのですから今迄言わなかつたのです。併し段々段々その今言う夜から昼間になる時代が迫つて来ましたから、それで人を救うには早く、大勢の人に、それを耳に

霊界が明るくなると
魂の汚れた人は
掃除をされて苦しむ

われましたがね、あれもまあよく似ているのです。ノアの兄弟というのがありますね、兄弟がやはり神懸りになつて神様から知らせられた。

入れなければならんと言ふ訳で、ま今日初めてこの大勢の方の前で喋るのです。さつきノアの洪水の事をちよつと鈴木さんが言われまして、あれもまあよく似ているのです。ノアの兄弟というのがありますね、兄弟がやはり神懸りになつて神様から知らせられた。

「もうじき大洪水がある、人類の大半はそのそれに捲込まれてしまふ、だから一人でも多く助けろ」と言うのでノアの兄弟が非常にその怒鳴つたんですね。知らした処が中々信する人がなかつた。それで信じてた人はたつた六人なのです。ですからノアの兄弟二人と合わせて八人です。八人だけが信じた訳ですね。そうしてどうすればいいかと言うと、箱舟を作れと言うのです。ノアの箱舟と言うのはね、丁度銀杏の形の形をしたものです。というのは丁度この言うふうになるのです。だから洪水の時もこの上に、猛獣だとか、大蛇とかいうのが上つて来る。その危険を救うために考えた。箱舟を作つてそして待つていた処が、あれは、四十日雨が降つたと言う説と、百日雨が降つたと言う説がありますね、これはどっちもみち幾日も続いて降つたのです。——そして段々段々その水高が増してですね、そして洪水になつたのです。そうすると箱舟に乗つたものだけが助かつたけれども、あとの

私共の魂も美しい霊界に相応しい魂に

初代会長

多田 光行

明主様が、かつて日比谷公会堂におきまして御光話下さいました時の後半部分の御録音を拝聴させていただきました。

前半におきまして、明主様は、これ

から愈々神様が地上天国、昼の世界、あるいは真の文明世界、全ての人が真に救われた幸せな文明世界である地上天国を創造される時期になつてきたと御教え下さつております。また別の御

表現では、今までは比較的悪が支配的であつた世の中でございましたけれども、それが愈々善が支配的な世の中になつてくるということでございます。さらに、生命の安全が確保された、そ

ういう素晴らしい世界を、これから神様が創造していかれるとも御教え頂いたわけでございます。従いまして私共人間はその素晴らしい、美しい世界に相応しい魂を持った人間に一人一人がなつていかなければいけないということを仰つたわけでございます。その前半の御教えに引き続きまして、後半の部分におきましては、これ

から神様が地上天国を創造していかれます時に、それと同時に霊界がだんだん明るくなつてくると御教え下さっております。「明るくなる」ということは、だんだん霊界が浄まつてくるということでございます。従って私共人間の魂も、その浄まつた美しい霊界に相応しくなっていかなければいけないわけでございます。

そういう時期が愈々近づいたということを世の中の人々、世界中の人々に一日も早く知らせ、そして一人残らずの人間が、そういう素晴らしい世の中に生かされていただくお許しが頂けるようにならなければいけないということをお願いいたします。

そしてこの御講話の最後の締め括りといまして「ノアの方舟」、これは旧約聖書にあるわけでございますけれども、そのノアの方舟を喻えにひかれるわけでございます。明主様は、ここで御教え下さったことを、今自分が言つて、ちょうどノアの方舟の時と同じように、誰も信じないかもしれないけれども、これは本当の事なんだと仰るわけでございます。ですから、何とか皆がその事に目覚めてほしいと仰つて、最後の締め括りをして下さるわけでございます。

なおこの中で人名として「徳川さん」がさつき話したということで、霊界のことをちょっと仰るわけでございますけれども、これは徳川夢声さんの事でありまして、日比谷公会堂で明主様がお話下さいました前に、徳川夢声さんがご自分の体験談を話されたわけで、それを指しておられます。それからもう一人「鈴木さん」と仰る方がご自身の体験談をお話されたわけで、それを受けて明主様は御教え下さっているわけでございます。

明主様が、この後半部分でお話下さいましたように、これからだんだん霊界が明るくなつていく、だんだん霊界が浄まつた、大変良い世の中になっていくわけでございます。一方で、前半の部分の御教えでは、これからだんだ

御教えの

一言一句に 込められた 神様の御心

ん善の勝つた、善の支配的な、そういう世の中になっていくということ、それから病氣、貧乏、争いというような苦しみが根本から解決された、つまり生命の安全が確保された、そういう素晴らしい世の中を、これから神様は創造していかれる時期が愈々切迫しているということを、仰っておられたわけでございます。

先達でも申し上げましたように、明主様の説かれました数々の御神書の中で、ここで御教え下さっておりますことが一番根幹をなしているわけでありまして、そういう地上天国という世界が近づいているから、その素晴らしい地上天国、霊界が明るい、そういう美しい世の中に相応しい魂の人間に、今のうちに一人一人がなっていかなければいけないということでございます。そのために、今まで行ってきた間違つたことについての悔い改めを明主様は私共に勧告して下さいるわけでございます。

もちろん今までも心の美しい、魂の清まつた方もたくさんおられたわけでは、やはり神様に背き、また神様の御心に反したことをたくさんしてきているわけですから、これはもちろん、私共は霊界と現界の間を何回も往復しているわけですから、この今世だけの事ではなくて、前世、あるいは前々世、あるいはさらに前々々世、それ以前の事も、全て含まれるわけです。その間、私共人間は、神様の御心に反したことでもたくさんしてきているわけでありまして、そういうことを心から悔い改めて、これからは神様の御心に叶つた魂の人間にならせていただくという気持ちで強く持たせていただいた時に初めて、神様は私共の一切のそういう誤りを許して下さい、これからの素晴らしい地上天国に永遠に残して下さいるわけでございます。

もちろん神様は全ての人間を救おうとして下さっているわけですから、私共人間の方がそういう神様の御心に叶うようにならなければ、神様は大変に悲しまれるわけです。その結果、そういう気持ちにならない人間は地上天国に残していただけないことになってしまふわけですから、現実考えてみますと、現在の私共のように、ただ自分だけ良ければ良いと考えたり、他人が少しぐらい苦しんでいてもいいというような心の持ち主ばかりが集まつていたのでは、いくら世の中を良くしようと思ひましても、良くなるはずがないわけです。やはり私共一人一人が、神様の御心に叶つた魂の人間にならせていただく初めて、この世に地上天国が創造されていくわけでございます。

この地上天国の創造ということとは、私共にとつて大変に喜ばしい、嬉しいことでございます。けれども、一方に於いて私共は、そういう美しい、素晴らしい世界に相応しい人間になるようには、これから努力していかなければいけないということでもあるわけです。ところで、どうすることが神様の御心に叶うことなのかということは、明主様の御教えの一言一句の中に込めて下さっているわけでございます。ですから、その明主様の御教えが一つ一つ添つていくことで、誰もが永遠に御救い頂ける道を進ませていただくわけでございます。その事を明主様は、説き明かして下さいるわけでございます。

神様の御心に叶う一番根本として、明主様が何時も仰っておられますように、まず人間は誰しもが、誠、利他愛という気持ちにならなければいけないということでございます。神様の御心は、世の中の全ての者が救われること

でございます。その事を神様は望んでおられるわけです。ある限られた者だけが幸せでいいということではないわけですから、神様は全世界の全ての人々が幸せになることを望んでおられるわけですから、従って私共も、その神様の御心に少しでも近寄らせていただくかなければいけないわけでございます。

誠、利他愛の心を持ち 全ての人をお救いする

最近ではだんだん、世間一般でも、世界の人々、人類全体の幸福ということ、これが言われ出しているわけですから、これは大変喜ばしいことだと思ひます。

黎明教会にも
神様は多くの
役割と使命を
与えて下さっている

お話をしたんだということを仰っておられるわけです。

日比谷公会堂において、当時、今から三十年前に、初めて世間一般の方を対象に、こういうお話を明主様はされたわけでございます。これがさらに拡大して、いよいよ私共の周囲の方々、さらにはもう一歩進んで全世界の方々に、この事を伝えるということが、神様の一番の御意志であるわけでございます。一日も早く大勢の人に、この事を先ず知らせなければいけないということでございます。

3面からの続き

私共は、明主様のこの御教えを世の方々にのお伝えさせていただく、先ずその第一歩を踏み出させていいただくわけにございます。

その御教えと同時に、私共は神様の御救いの御光、御力を頂いているわけにございます。神様は、私共だけではなくて、世の中、全ての人々を救おうとされる御心の現れとして、この御浄霊の御力、神様の御救いの御力のお取次きを、私共にお許し下さっているわけにございます。

私共の頂いておりますこの御守様については、今まで何回も申し上げていることでございます。この御守様を通

して、もちろん私共自身も神様は守つて下さいますけれども、それだけではございません。この尊い御守様一体は、この世の中の全ての人々が救われるようにという神様の御心が込められているわけでございます。その御守様を私共は胸に頂いているわけでございます。

その神様の御心の現れとして、私共はいつ何時でも、またいかなる所においても、この神様の御光をお取次ぎさせていただくことができるわけでございます。この御光を、これから一人でも多くの方々に取次ぎさせていただき、またこの御教いの御教えを一人でも多くの方々に伝えさせていただくということを、これから一生懸命させていきたいと思います。

これから神様は色々な形でもつて御神業を進めたいかれると思います。それ共一人一人に、色々なお役を与えて下さると思うのでございます。その時に、私共は、それぞれの与えていただいた使命を十分に全うしていただきたいわけです。もちろんこの黎明教会にも神様は多くのお役割、使命を与えて下さっていると思うのでございます。神様から賜りましたそれぞれの使命を十分に果たさせていただいて、そして一日も早く、世の中の全ての方々が神様の御救いの網に掴まされていただくために、本当に素晴らしい地上王国が創造されるように、一人一人が努力させていただきたいと思います。

一人一人の力というのは大変細やかであり、また、個人個人は色々な壁にぶつかる場合もあると思います。そういう時には、お互い手を取り合つて

助け合つて進ませてくださいだいたいと思
います。助け合うと申しませんが、た
だ表面的な安易なことではなくて、も
っともつと深く大きい、神様の愛の御
心に少しでも近寄らせていただいで、
進ませていただきたいと思うわけでござ
います。これからの年月が「本当に
素晴らしい年月であった」というように
お互いに喜ばせていただけるように、
これから努力させてくださいだいたいと思
います。

(一九八二年一月一日)

救い主・明主様御生誕 142 年祭



御教えの研鑽と実践をお誓い

天津祝詞を奏上する
信徒のみなさま

2024年12月23日
救い主・明主様の御生誕
2年祭を執り行わせてい
きました。国立京都国
に信徒が一堂に集い、こ
時にご参拝が始まりま
全人類救済のため御出
いました。

救い主・明主様の御生
お迎えし、心よりの感
折りを捧げさせていた
した。

公会堂に於ける御講話
録音を拝聴させていただ
いた。御尊影を拝し、
を聞かせていただきま
休養を積みまして、会
よりご挨拶を賜りま
(5、6面参照)。

日比谷の御下、たまに御肉を食した。最先生もまたした。

有志の方々が生けられた献花が並び、参拝者の歯黒の目を染しませました。

イベントホールでは、開演はさゆ里様・小川美苗様・塩賀明香殿によるフルート・十七絃・華の合奏「ジュビター」

御尊影を拝し
御肉声を拝聴

続いて、今年は大阪芸術大
学教授の河田昌之先生による
記念講演を聞かせていただきま
しました。河田先生には資料研
修館開館40周年記念の際にも
ご講演頂きました(『黎明』35
0号参照)。御生誕祭では
「江戸時代の美術の豊かさと
魅力」(宗達・光琳・抱一を中
心)と題して、琳瑯芸術
の特徴について分かりやすく
ご解説下さいました(8面参
照)。

(ホルスト)、「手紙」拜啓十
五の巻へ」(アンジエラ
アキ)の一曲で華やかに祝賀
が始まりました。御神前に祈
供えられた無脂肥無糖栽培米
吟醸酒「京神楽」の饗開き
の後、北川支部長 馬場雄
子先生の発唱により全員が
乾杯させていただきました。全
会皆が一堂に会し、御生誕
一椿に美味しいお食事を頂く
楽しい有意義な時間を暮らさ
せていただきました。最後に

再び休養を挟んだ後、合唱団 Reimie によります奉納演奏コーラスの映像を見せていただきました。曲目はウィヴァンディ作曲の「グロリア」より合唱曲1曲とヘンデル作曲「救世主メサイア」より「バレルヤ」でした。今年はオルガン伴奏と共に弦楽器のアンスラフルも加

新川先生指揮にて聖明教会を
を合唱せていただきました、お慰
来年はさらに多くの方々と
ご一緒にご参拝のお祈りがあ
れますよう、御教書の研鑽と
実践に一層努力することをお
願いさせていただきます。

7、8月に御寺園祭の祝賀
奉納演奏などの写真と動画

救い主・明主様御生誕 142 年祭

曇りを取り叡智を磨く

叡智とは

神様の御実在を認める
賢明な人間が表す智慧

御生誕祭ご挨拶



会長 多田 光史

御生誕142年祭、おめで
とうございます。高い所から
慈雨を下さいますが、一言ご
挨拶申し上げます。
救い主・明主様は、私共人間
明主様の御出願を賜り、私共

は日々数限りない御守護を賜
っておりますことに衷心より
感謝申し上げます。この御生
誕祭に一同ご参拝の御許しを
頂けましたことに、重ねて御
礼申し上げます。
昨年、この場で御生誕14
0年祭までに一人一人が百人
の方をお導きさせていただく
という目標を立てさせていただ
きました。その折に、この
御道の事をお伝えさせていただ
く、あるいは御浄霊のお取
次ぎ、お導きをさせていただ
いた

は、いふ迄もなく、邪念の爲に
物の正しい判断が困難な
状態である。此例を一つか
みよ。今日政治界は勿論の
事、凡ゆる有識者、学者、或
問題に對し意見を述べる場合、
小さい問題でも、多数の人間
が何時も掛つて頭を悩ませ
なければ結論が見出せない。
少し大きな問題になると、十
数人又は数十人が頭を悩め、
何々何々の議論を繰り返し、何
回も何回も会合しても仲々結
論を得られないというのであ
るから、如何に叡智の働きが
鈍いかという事である。
考えても見えない。如何
なる問題と雖も結論はたった
一つである。決して幾つもある

宗教といふべきである。斯様
に厚くしる言わなければなら
ない事程左様に、現代人は頭
脳が悪くなつてゐる訳であ
る。
此意味に於て叡智ある人
は、如何なる問題に打つたか
つても数分間、乃至数十分間に
結論を導き出し得るのである。
之に就て私は部下に對し、如
何なる問題に打つても結論を
見出すまでの議論は先ず三十
分位を限度とし、長くとも一
時間以上になる場合は、その
会合を一時中止し、他日を期
して再会談するか、又は直接
私に相談せよというのである。
明主様は、ごぞ、叡智とは

ある。斯事を實に把握せざる
限り正しい行動も安心立命も
得られないのみ、空虚な酔
生夢死の人生に墮る恐れが
ある。然らば神の恩恵とは何ぞ
やといふは、此地上をして理
想世界、言い換へれば地上天
国を建設する事である、とは
いふとそれは恐ろしく、その規
模に於て、其構想に於て、仕
難大なる事柄に絶するもの
がある事は想像に難からな
い。何となれば無限に歩み
つた文化は、極端なところが
いつかである。此意味に於て
現在までの世界歴史は、基礎
的工作に過ぎなかつたのであ
る。そして神は一人一人そ
れぞれの使命を与へ、特長を
持たせ、生き更り死
に替り、理想目的
に向つて前進しめ
つたのである。従
而爾も悪も、戦争も
平和も、破壊も創造
も進化に必要な一
過程に過ぎない事を
知るのである。

そして今は何
なる時かは詳細にい
た如く、私の囁
き、神様の御出願に
導かれ、今人類は野
蠻の衣を力ナク捨て、高度
の文化人たる域に達せんとし
つつある事である。茲には
めて戦争も病氣も貧乏も終
るべきのである。勿論本
術の出現はその為の先導であ
り、核心の神の恩恵によ
つて断えず人間に命令を下し
つつある。それは如何なる手
段によるかといふに、靈界
に於ては人間一人一人の魂が
存在する。此魂を私は名づ
けて靈魂という。此靈魂に先
ず命が下るのである。然るに
魂は人間霊体の中府に在る現

いたたぐために、またこ
れからの一層進歩した時代
でもお使い頂くために、叡
智を頂くことが重要なので
ございます。
それでは叡智を頂くには
どのような心持でいただく
べきか。その事に
ついては、「できるだけ叡智を
取らなければいけないので
す。それにはできるだけの御
書を讀むのである。そうす
ると、御出願に於て神様の御
意、御目的が地上天国建設
であり、そのため一人一人
に使命とその遂行に足る特
長を与えられていること、現
在の御生誕祭という一大転換
の時期に於て、本医師、つまり
御浄霊の御力が核心のもの
であること、を御説き下さ
して下さいます。さうに、多く
の人間は多量の叡智を有して
いるものの、私達人間には魂を
通じて神様からの命、御心が
伝達されていると御教示願
っております。このように私達
一人一人は靈界によつて神
と繋がりを保持していただく
と教へておられます。この事
が、この事だけから
でも、人間のなすことを
神様は御存知であるわけで
ございますが、この世の全て
は神様の御心通りに進んで
いることを御導きしていただ
くことが非常に大切ではない
かと存じます。この神様の御
心を御導きしていただく叡
智の御教示でございます。近
年A-Iの進歩は目覚ましく、
人間の平均的なIQを越える
ものが出て来たとも言われま
す。しかし、神様の御心は、
神様と靈界の繋がりを保持
していただくには、神様に
命を授けていただくべく進
歩していただくだけでは不
足で、とれどA-Iが進歩し
ても、人間の役割として取
り代わられることはいか
ないかと存じます。現在の非
常な状況に、全ての問題
を御教示に基づいて解決さ
す

夜昼転換期の今

御神書を拝読し より深い真理を 掴みましよう

くあたり、叡智を頂くことが
重要であることをお説き
していただきました。そこで、
本日は叡智を頂くというこ
と、さらにこれから神様の御
心について、二つに御導き
させていただきますと思いま
す。
そもそも叡智とはどうい
う智慧なのかについて、「五
智を説く」の御教示に次のよう
に御説き下されております。
「叡智とは、賢明な人間が
表す智慧、仏教で智慧証
覚とか、単に智慧というの
は、神の御実在を認めない
ことを指すのである。然し今
世の中は此叡智を乏しく人
は洵に少ないのである。それ

りはない。それが多数の頭
脳と、幾多の日時がかかる
といふのであるから、実に情
ないの一言に尽きるのだ
である。そのいふのも全く
御導き不足なもので、叡智の
足りないから、叡智の足り
ないという事は頭脳が働
いていないから、頭脳が働
いていない事は邪念がある
から、邪念があるという事
は、物主を信ずるからで、唯
物主を信ずるという事は、
神の御実在を認めないから
で、神の御実在を認めない
という事は、神を信じさせ
得る宗教がないからである
とすれば、神の御実在を認
める宗教こそ、本當に生き

神様の御実在を認める賢明な
人間が表す智慧であり、叡
智があれば、どんな難問に
面しても短時間に結論を導
き出すことが出来ます。
この叡智に於いてより深く
まかせていただくために、
神様の御目的、私達人間の
在り方、さらには現在が
いつの時代にあるのかにつ
いて御教示下さっている御
教示を一つ一つ御読ませ
ていただきます。
「人間が現世に生れるとい
う事は神の命によるのであ
る。生命の命は命令の命と
同であるのもその意味であ
る。誰しも思ふ事は、人間
は如何に生れたかという事

あり、全世界は今正
に新時代に向つて、大飛躍
しつつあり、今人類は野
蠻の衣を力ナク捨て、高度
の文化人たる域に達せんと
しつつある事である。茲には
めて戦争も病氣も貧乏も終
るべきのである。勿論本
術の出現はその為の先導であ
り、核心の神の恩恵によ
つて断えず人間に命令を下
しつつある。それは如何
なる手段によるかといふに、
靈界に於ては人間一人一人
の魂が存在する。此魂を
私は名づけて靈魂という。
此靈魂に先ず命が下るの
である。然るに魂は人間
霊体の中府に在る現

魂に向い靈魂を通じて神の
命を伝達するのである。然
し作らぬ一般人類が神の
命を直感し得る事は至難
である。或程度に靈魂を
浄化された霊体の保有者
に於ては可能である。それ
は、多数の人間は多量の
叡智を有しているものの、
私達人間には魂を通過し
て神様からの命、御心が
伝達されていると御教示
願っております。このよう
に私達一人一人は靈界に
よつて神と繋がりを保持
していただくことが、この
事からでも、人間のなす
ことを神様は御存知であ
るわけでございますが、こ
の世の全ては神様の御心
通りに進んでいることを
御導きしていただくこと
が非常に大切ではないかと
存じます。この神様の御
心を御導きしていただく
叡智の御教示でございます。
近年A-Iの進歩は目覚ま
しく、人間の平均的なIQ
を越えるものが出て来た
とも言われます。しかし、
神様の御心は、神様と靈
界の繋がりを保持して頂
くには、神様に命を授け
ていただくべく進歩して
いただくだけでは不足で、
とれどA-Iが進歩しても、
人間の役割として取り
代わられることはいかに
ないかと存じます。現在
の非常な状況に、全ての
問題を御教示に基づいて
解決さ

いたたぐために、またこ
れからの一層進歩した時代
でもお使い頂くために、叡
智を頂くことが重要なので
ございます。
それでは叡智を頂くには
どのような心持でいただく
べきか。その事に
ついては、「できるだけ叡智
を取らなければいけないの
です。それにはできるだけ
の御書を讀むのである。さ
うすると、御出願に於て
神様の御意、御目的が地上
天国建設であり、そのため
一人一人に使命とその遂行
に足る特長を与えられて
いること、現在の御生誕祭
という一大転換の時期に於
て、本医師、つまり御浄
霊の御力が核心のものであ
ること、を御説き下さして
下さいます。さうに、多く
の人間は多量の叡智を有し
ているものの、私達人間に
は魂を通過して神様からの
命、御心が伝達されてい
ると御教示願っております。
このように私達一人一人
は靈界によつて神と繋が
りを保持していただくこと
が、この事からでも、人
間のなすことを神様は御
存知であるわけでござい
ます。この世の全ては神
様の御心通りに進んでい
ることを御導きしていただ
くことが非常に大切では
ないかと存じます。この
神様の御心を御導きして
いただく叡智の御教示で
ございます。近年A-Iの
進歩は目覚ましく、人間
の平均的なIQを越える
ものが出て来たとも言わ
れます。しかし、神様の
御心は、神様と靈界の
繋がりを保持して頂く
には、神様に命を授けて
いただくべく進歩して頂
くだけでは不足で、とれ
どA-Iが進歩しても、人
間の役割として取り代
わられることはいかに
ないかと存じます。現在
の非常な状況に、全て
の問題を御教示に基づ
いて解決さ

以下6面へ続く

出来る丈の感謝報恩を

神様は利他愛の人を 愛され御恵み下さる

5面からの続き

せていたという信念を改めて持たせていただきました。ありがとうございます。

神様の御心については、私自身もその片鱗すら掴ませていただけていないと思いましたが、ここで、神様の御心という事になり、自ら潔いゆっておられる御教を少し拝読させていただきます。

「神仏の御心は、親の心と同じようなものであり、信徒は子のようなものである。子が親に向って、或欲求をする場合、見るも悲愴な苦行は、親として決して快いものではない。故に、其欲求が正当であるならば、親は喜んで、否、吾子を養はせんが如く、行苦行などさせず、少しでも多く与えたいが真情である。随而、苦行を求める信仰は、其目標である神は、正神である筈がなければ、斯ういう信仰は悉く迷信であるといつて可いのである。」

然し、子が如何に親の恩恵を受けようとしても、其子が常に我儘勝手な事をし、親を顧みずして、只親から貰おうとしても駄目である。矢張り平常から、親を思い、親に尽し、親の言う事を聞き、親の善い行を重ねなければならぬのである。世には御利益

ばかりを欲しがり、絶大な御利益を受けながら、それに対する感謝報恩を忘る者があるが、是等は実に親不孝者で、終に親から見放されてしまうのである。

は致し方ないのである。然し、斯ういふ事に関して、自己の非を悔やないで親を怨むという事になり、自ら潔いゆっておられる御教を少し拝読させていただきます。

故に、人は神仏に対しては、よくよく神仏の御心を悟り、人として無量からぬ正しい御求を、精々しく淡白になし、又、出来る丈の感謝報恩をするのが本当である。

そうして、感謝報恩とは、一人でも多くを救う事である。といつて人間には、人間を救う力は到底有る訳がないから、自分が救われた神仏へ導くより外は無いのである。そうして、人を導く其徳に由つて、それだけ自分も救われるのである。又、人を導く暇のない人などは、それに換るに、金銭物品を奉る事も結構である。」(「宗教的治病に於ける神徳」)

私達は神様に対して、大変高い存在であるが故に、何でも望みを叶えて下さる存在にいったような都合の良い考えを抱いてしまつてが往々にしてあります。けれどもそれは限りであり、常日頃から神様を拝み、神様の御心にな

う行いを積み重ねなくてはならないと御垂示願つております。神様の御心を頼ませていただき、神様の御心になんかさせていただければ、どれほどでも幸せにして下さるわけでございます。そもそも神様にとって私達信徒は我が子のような存在であり、いくらでも御恵みを与えてやろうと思つて下さっており、実際目録大なる御恵みを頂いているわけでございます。

例えば、見逃してしまひやすいものとして、大難を小難に変えていたたき、小難を小難に思ひ、御教に導かれては次のように御恵み頂いておられます。「信仰に入ると浄化があるが、つまり神様の御恵みによつて小さく清むのです。」(教28 昭和28年11月17日)

また別の御教では、「災難つてはね、大々人間には決つてゐる。ちゃんとした人、人はその時に災難に会うやうに決つてゐる。そこで大難を小難に、小難を無難に変えていただく様に御願いするのが本当です。」(光話23)

私達は、大難を小難に変えていたたいた場合、見逃したり、申し訳なくもその小難に対して不満を持ったりしてしまつてゐると思ひます。しかし、例えば交通事故だとする

と、もしも対物ではなく対人事故だったら、相手が車でなく歩行者だったら等と当時の状況から想像力を働かせて考えさせていただくことで、見逃してしまつていた御守護に気付かせていただくものと思ひます。

頂いた御恵みへの感謝が薄れ、その御恩報じを忘れてしまつと見放されてしまいかねないわけでございますが、裏を返せば、私達がその条件にかなうように努力していただければ良いわけでございます。むしろ親である神様を愛し、敬するの気持ちで、楽しんでお祈りしていただくべきだと思います。その感謝報恩、御恩報じとして、一人でも多くの人をこの御道にお導きしお救いすることが、最善の方法である御教を下さつております。元来人をお救いする力を常人は持ち合せておりません。しかし、この御教が核心のなものである御浄霊をお取下さることで、この御道に、人を救うこととが誰にでも何度でもさせていたたけるわけでありませう。つい先日御守護を頂かれた方の中へ、ご主人様の御病がきつかけた方お仕事の現場が同じであつた信徒の方より御浄霊を頂かると、十年先の健康をその日は笑にしていただ

一人でも多くの方に御浄霊をお取下させていたたきたいと思ひます。

本日は教習と神様の御心に關して、御教を少し拝読させていただきました。教習とは神様の御心を頼ませていただく智慧であり、教習を頂くには絶えざる御教の拝読が必要不可欠であります。また神様への感謝を忘れず、一人でも多くの方をお救いすることが神様の御心になつてゐることであり、そのための簡単にして最大の方法として御浄霊の御力を与えていただいていただくわけでございます。

私達はやむを得ず自分さえ良ければそれで良いという自己愛に陥つてしまひます。しかし、この神様はそうではなく利他愛の人、他人を救う人を愛され、御恵み下さるわけでございます。自分が救われたために他人を救つていただくのは本末転倒になつてしまひますが、人を救ひ出すという何にも代えがたい幸せを何度でも経験させていたたけるといふ、これほどまでに素晴らしい御力を私達は頂いてゐるわけでございます。現在、夜寝転換という人類史上空前の重要な時期に、私達は人類救済という最先端の使命を担つております。今こそ失敗を恐れず、神様を愛と敬からせられるやうに、御教の拝読と実践により一層御助けをいただきますよう、今日の日に一回で心新たにお誓ひ申し上げたいと思ひます。

本日はこの後、大阪芸術大学の河田昌之先生よりご講演をいただきます。河田先生とは、丁度2年前からご縁を頂きました。そこからご無理をお聞き入れ頂き、黎明教会資料館研修館の開館20年の節目に当たつた2024年9月23日に特別

講演にてお話し頂きました。その時の大反響を受け、厚かましくも本日のご講演をお願いしました。ご快諾頂いた次第であります。御教に信仰と芸術との関連について、「信仰の目的は魂を磨き、心を清める事であるが、その方法としては三つある、一は、難行苦行や災害による苦しみ、二は善徳を積み重ね、三は高い芸術によつて魂を向上させる事である、以上の中、最も簡単で、捷徑なのは高い芸術による感化である、而も楽しみながら知らず知らずには磨かれるからだ、之程結構な事はあるまい。」(「歌集」山と水に就て)と、高い芸術を通して、楽しみながら信仰の向上を図ることを御推奨下さつております。本日は明主様が一番好きな画家と仰られた尾形光琳を中心に琳派の芸術についてご講演いただきます。

この御生誕祭は単なる宗祖のお誕生日のお祝いではなく、全人類を水邊にお救い下さる救世主の御出陣に心より感謝を捧げさせていただきます。御祭りでございませう。今は私達が全人類を代表してこの御生誕祭にご参拝させていただきます。この御生誕祭を全世界の方々と共に祝いさせていただきますよう、より一層の努力精進をお誓ひ申し上げます。

このような素晴らしい機会を持たせていただきましたことを皆様と共に、神様に心から感謝申し上げます。また、最後になりました、本日を迎えるに当たり、数多くの方々のご協力を頂きましたこと、深く御礼申し上げます。私からの挨拶と代えさせていただきます。

(2024年12月23日)

講演にてお話し頂きました。その時の大反響を受け、厚かましくも本日のご講演をお願いしました。ご快諾頂いた次第であります。御教に信仰と芸術との関連について、「信仰の目的は魂を磨き、心を清める事であるが、その方法としては三つある、一は、難行苦行や災害による苦しみ、二は善徳を積み重ね、三は高い芸術によつて魂を向上させる事である、以上の中、最も簡単で、捷徑なのは高い芸術による感化である、而も楽しみながら知らず知らずには磨かれるからだ、之程結構な事はあるまい。」(「歌集」山と水に就て)と、高い芸術を通して、楽しみながら信仰の向上を図ることを御推奨下さつております。本日は明主様が一番好きな画家と仰られた尾形光琳を中心に琳派の芸術についてご講演いただきます。



御讃歌を奉唱される信徒のみなさま(国立京都国際会館メインホール)



祝宴

イベントホールでの祝宴

御生誕祭 和やかに祝宴



茶の湯 Reimei による

呈茶接待



参拝者の目を楽しませた

献花



おいしく食事をいただく子供たち



奉納演奏

弦楽器のアンサンブルも加わった合唱団 Reimei のコーラス

開宴の調べ





▲ 講演される河田先生

御生誕142年祭 記念講演

江戸時代の美術の豊かさの魅力 — 宗達、光琳、抱一を中心に —

大阪芸術大学教授 河田昌之先生

河田先生は冒頭に「美術の中で最も親しみやすいのが琳派の作品であります。本日は江戸時代美術の豊かさを宗達、光琳、抱一を中心に見ていきたいと思っております」と述べられ、講演を始められました。

まず、琳派が生まれた時代背景から説明下さいました。琳派の源流である光悦・宗達が活躍した寛永文化は桃山文化と元禄文化の間のちょうど過渡期に当たる時期で



この頃は京都の公家、皇族、豪商等が中心となり平安時代の華やかな王朝文化を復興することを目指した時代でした。そして、琳派の特徴について「琳派の美術の特色は豊かなデザイン性でございます。例えば金箔や銀箔をたくさん使います。それから構図が非常に大胆なんです。パターン化するようなデザインも行って、例えば型紙を使うというところもやっています。そして技法として色のにじみを使ってボリューム感を出す、垂らし込みという技法も活用します。題材としては花とか木ですね。草花もございまして、あるいは古典、源氏物語や伊勢物語といった古い時代の物語、あるいは和歌とかも人物も描きますし、山水等の自然景ですね。非常に多様な世界が題材にされております」とお話下さいました。

続いて、琳派の芸術家についてそれぞれ主な作品を取り上げてご紹介下さいました。この絵の上に重なるように書

本阿弥光悦は古典を復興しようとする公家、皇族、豪商たちと関わり、伊勢物語や源氏物語に挿絵を入れた幀軸本という版本を出版しています。そして、光悦と同時期に京都で活躍した、俵屋宗達独自の造形感覚を持った京都の町絵師でした。

光悦の代表的な作品として、極端に蓋の甲が盛り上がり、つるつるの造形的なデザインのもの「舟橋時給図」(東京国立博物館、以下「東博」蔵)、宗達独自の造形感覚が表れている代表作として「松園図」(松園図)と「杉戸図」(垂らし込み技法が使われた作品として「運船水禽図」(京都国立博物館、以下「京博」蔵)、「牛図」(頂妙寺蔵)を例に挙げてご紹介下さいました。そして、光悦・宗達下の合作である「観下絵三六歌仙和歌巻」(京博蔵)について、「非常にダイナミックな観や大地を金や銀で非常に大胆に表しております。その絵の上に重なるように書

書いているのが光悦なんです。光悦は下絵の動きに呼応するような筆遣いで鳥の飛翔を筆に添えてリズを取った作品を作っております」とお話下さいました。また、同様の下絵と筆の関係は、五輪美符館、そして黎明教会資料館所蔵の色紙にも見られる。次に尾形光琳についても「八橋時給螺鈿図」(東博蔵)、「紅白梅図屏風」(MOA美術館蔵)、「燕子花図屏風」(根津美術館蔵)、「群鶴図」(フリーア美術館蔵)等を例にご紹介下さいました。あえて人物を描かずに作品の背後にある古典文学の存在を感じさせたり、対象を意匠化して大胆でリズミカルな構成にまとめたたりする光琳の斬新さを教えていただきました。

また、乾山・仁清についてもそれぞれの作品の比較も交えて、ご紹介下さいました。乾山は光琳の弟で、乾山の晩年に光琳が絵付けをした合

作も多くあります。仁清は「色絵藤花文茶壺」(MOA美術館蔵)等、非常に華やかな茶壺の名作を多く残しています。乾山の「色絵水梨文角皿」(京博蔵)と仁清の「色絵金銀文茶壺」(MOA美術館蔵)を比較して、「仁清はシャープな感じがします。それに対して乾山は水が割れている状況をデザインしているんですけれども、非常に生活に密着しているようなイメージが感じられます」とお話下さいました。

そして酒井抱一について、抱一は姫路藩主、酒井家の当主でしたが、俳諧や絵画といった趣味に打ち込み、高く評価される作品を残すとともに、光琳・乾山を顕彰し、作品を集めてそれぞれ「光琳百図」「乾山百図」を作ったということです。

琳派の継承の象徴として「風神雷神図屏風」を挙げられ、宗達の「風神雷神図屏風」について「実はこれは落款もサインもハンコもございませんけれども、他の宗達が関わった作品と筆致が非常に似ていて、大胆な構成ですとか表現ですとか、非常に魅力的な作品でございます。宗達は彫刻(三十三間堂「風神雷神像」)や屏風(天神縁起屏風)を参考にしながら、そこからヒントを得てこのような雷神の姿を作り上げているんですね。色々と勉強を行

って、その結果が自身の作品に投影されているというところがよく分かっております」と話され、さらに「宗達の風神雷神図が光琳により写され、それがまた抱一によって写されています。ということとは風神雷神図というものが宗達・光琳・抱一を繋ぐ一つの大きな図像であったということが分かります。光琳は宗達、抱一は光琳を顕彰しているということを示しているものでございます」とお話下さいました。

その後、まとめとして、御教養に御説き頂いている点について、美術史研究の視点から所見を述べられました。「光悦や光琳が非常に独特の造形世界を持っています。ここに寓曲した形に視網の蓋を作ってみたり、そこに金銀箔を貼ってみたり、そういうところを非現実的な造形感覚というものが大変面白いと感じられたのだと思います。そしてそれがまた見ている者にとっても非常にインパクトが強く、そういう独自の造形世界を2人は目指しております。全く新しい世界を築いていると言ってもいいかと思っております。一などとお話下さいました。

最後に、「琳派の芸術家が目指したのは芸術の持つ豊かさです。誰が見てもいいなど思っような作品をそれぞれこの時代の教会の資料館研究館も様々な琳派の作品であふれておりますので、また改めてそういう目で見ていただきたいと思います。気持ちが豊かになると思っています。それを作家たちは求めていくんですね」と話され、講演を締め括られました。

普遍的な良さを生む作風

芸術の持つ豊かさを目指す

祝宴の最後に黎明教会歌を斉唱

無施肥無農薬栽培米吟醸酒「京神楽」の饗宴

